

現代インドネシアの公正／正義—— リスク社会における災害対応の観点から

西 芳実

東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム

はじめに

本稿では、現代インドネシア社会において災害とテロへの対応が表象のレベルでどのように行われているかを、リスク社会における公正・正義の表れ方という観点から検討してみたい。

リスク社会とは、天命や科学のように人びとによって広く共有される因果応報の秩序が失われ、個々人の置かれた状況が個々人の選択に依拠していると感得されるような社会のことである。そこでは、規範や真理・秩序の正統性はもはや普遍的には保障されず、誰にとっても正しい選択は存在しなくなり、自らの選択の結果がもたらすリスクは自らが引き受けることになる。人びとがそれぞれに「成解」(特定の場において当面成立可能で受容可能な解)を見つけることが求められている社会であるともいえる¹。

近年のインドネシアでは、この問題が自然災害とテロという2つの側面で顕著にあらわれている。災害は、いつどこにやってくるか予測できない。対応が必要であることは理解されつつも、対応が万全かどうか確かめようがないという状況の中で、人びとは災害にどのように備え、また、被災をどのように受け止めるかをそれぞれに問われている。また、海外の紛争地に人道支援のために赴いて身柄を拘束されたり、世界大での戦争を反映する形でインドネシア国内でテロが行われたりする。人びとは自前の国家を持つことで国民になり国家に守られるという従来のモデルは大きく崩れている。

このような状況に人びとはどのように対応しているのか。以下では、2002年バリ島爆弾テロ事件以後のインドネシア映画や災害対応関連書籍の中から、イン

ドネシア社会がテロや災害といった「リスク」にどのように対応しているかという課題に関連したものを取り上げて、そこで公正／正義がどのように扱われているかを見ることで、現代インドネシアにおけるリスク社会における災害対応について検討したい。

1. 2002年バリ島爆弾テロ事件と インドネシアのイスラム像

1.1 2002年バリ島爆弾テロ事件

2001年9月11日の米国同時多発テロ(以下、9.11事件)はインドネシアに新しい政治環境をもたらした。9.11事件は米国の覇権に対するイスラム世界の攻撃であるとの理解を背景に、テロリズムに対するグローバルな戦争が開始され、その過程でイスラムと暴力・テロリズムを結び付ける理解が拡大した。他方で、このような考え方にもとづいて行われる「対テロ戦争」は、米国覇権主義に対する憎悪を刺激した。

このように、9.11事件は世界に対し、越境するテロの脅威を実感させ、イスラムとテロや暴力とを結びつける考え方を強化するとともに、人びとがテロに対してどのような態度を取るか立場を明確にすることを迫ることになった。中東を中心とするイスラム世界において周縁に位置づけられてきたインドネシアも、世界で最大のムスリム人口を抱えた国家として、この見方から免れなかった。9.11事件に引き続き発生した2002年バリ島爆弾テロ事件は、インドネシアのムスリムがテロの犠牲者となるだけでなく、実行者にもなるということを世界に示すものとなった。これは、インドネシアの人びと、なかでもインドネシアのムスリムにとって、彼らがテロをどのように考え、テロにどのように臨むかという自分自身の立場を、世界に対して、また、同胞に対して示すことを迫るものだった。

このように、2002年バリ島爆弾テロ事件はインドネシアをグローバルな戦争の舞台に連れ出した。実行犯は東南アジアのムスリムたちであり、このこと

1 リスク社会は、ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックによって提唱され、アンソニー・ギデンズやニクラス・ルーマン等によって引き継がれた概念である。本稿では、リスク社会論の概要については(大澤2008)を、リスク社会における災害対応については(矢守2009)を、グローバル化との関連については(山下2008)を参照している。

はインドネシア内外の人びとを当惑させ、混乱させた。テロを支えるネットワークは東南アジアで国境を越えて広がっていた。バリ島爆弾テロ事件を実行したとされるジャマア・イスラミヤ(AI-Jama'ah Al-Islamiyyah)はトランスナショナルな組織であり、インドネシア、マレーシア、シンガポール、フィリピンといった東南アジアの複数の国に拠点を有していた。各国の地元組織と協力関係にあり、また、9.11事件に関与したとされて国際テロ組織と認定されたアル・カーイダ(Al Qaida)とも連携関係にあった。各国政府は東南アジアに地域の脅威が存在すると認識した。しかも、この問題は、東南アジア域内だけでは対応しきれない類の問題だった。

このことが、インドネシアのイスラムに新たな側面を付け加えた。それまでインドネシアでは、インドネシア国民の一体性を構築し、これを強化するものとしてイスラムが使われてきた。いまや、インドネシアは自らの背負うイスラムを世界の文脈の中に置いて捉え、説明せざるを得なくなった。インドネシアのイスラムは他者を傷つける危険なものか否かという問いは、国民統合を維持するためにも、また、世界の中でふさわしい位置を維持するためにも、インドネシア国内で、また、国外で、真剣に答えられるべき問いとなった。

この状況に対するインドネシアの対応にはさまざまなものがあった。ある者は、テロは犯罪にすぎず、信仰によって正当化されないと主張した。ある者は、インドネシアにおけるテロは外国人テロリストによって引き起こされたと主張した。この議論では、米国の覇権に対する攻撃やイラクにおける対テロ戦争は、外国人に持ち込まれてインドネシア国内で発生している事件であり、インドネシアは戦争の舞台となっているだけであるとされる。この考えは、災厄はインドネシアの外部に起源があり、インドネシアに入り込んでくるものであることを強調している。

このことを踏まえて、以下では、新秩序体制の終焉によりもたらされたインドネシアの新しいメディア環境のなかで登場した2つの映画をとりあげる。1つはバリ島爆弾テロ事件を題材にした『楽園への長い道』(Long Road to Heaven, 2006年)であり、もう1つはインドネシアにおけるイスラム恋愛映画の流行の先鞭となった『愛の章』(Ayat Ayat Cinta, 2008年)である。『愛の章』は観客動員数380万人の大ヒット映画となり、以後、イスラム的な特徴やテーマをもつ映画が次々と制作され、興行的にも一定の成功を収める

ようになった²。

1.2 インドネシア映画

インドネシア映画の歴史は1926年のオランダ統治下にはじまる。ウスマル・イスマイル映画センター(Pusat Perfilman Haji Usmar Ismail)の統計によれば、インドネシアはこれまでに2200本以上の映画作品(feature films)を制作した(Krishna 2006: 97)。インドネシアは東南アジアで最大の映画制作国であるといえる。インドネシアの多くの住民は、国語であり、人びとにとっては母語もしくは第二言語であるインドネシア語を話す。インドネシア政府は映画をラジオや出版、テレビと同様にマスメディアの1つと位置付けてきた。政府は映画を国民統合のためのプロパガンダの手段の1つとして使ってきたし、国民の理想的イメージや価値が損なわれないよう検閲を行うことで映画制作をコントロールしてきた。

インドネシアの映画産業は、インドネシア経済が急速に回復した1970年代に拡大した。同じ時期に、インドネシアの映画制作者たちはハリウッド映画のような輸入映画との競争にさらされるようになった。国民統合や開発、政府の政策を損なうような映画は検閲によって禁止された。1987年に民間テレビ放送が合法化され、1990年までに衛星によるテレビ放送がインドネシアを構成する島嶼部全域で見られるようになると、インドネシアの民間テレビ局は拡大し、シネトロンと呼ばれる連続テレビドラマがインドネシア映画の競争相手に加わった。

スハルト体制末期、経済危機や政治的不安定といった状況の中で映画の数は急速に減少した。1990年には制作本数が115本だったものが、1999年には3本に減少した。しかし、「改革」(Reformasi)の名による政治的移行が落ち着き、経済的な安定が回復すると、メディアや表現の自由化が進み、このことが新しい映画ジャンルを勃興させ、既存のジャンルをめぐるコンセプトにも変化をもたらした。ここに、新たな表現方法が登場したといえることができる。自主制作映画のサークルも発展し、既存の映画に挑戦するような

2 『愛の章』の原作小説の著者ハビブルラフマン・エル・シラジによる長編小説を映画化した『愛が祝福される時』(Ketika Cinta Bertasbih, 2009年)、イスラム寄宿塾の若者たちの迷いと成長を描く『3つの祈り、3つの愛』(3 Doa 3 Cinta, 2008年)、イスラム寄宿塾を舞台に、預言者を騙って秘術で人びとを支配する男に立ち向かう若者たちの物語を描く『預言者を名乗る』(Menagku Rasul, 2008年)、イスラム寄宿塾の女性の自立を描く『ターバンを巻く女』(Perempuan Berkalung Sorban, 2009年)などがある。

実験的な作品を制作した。

インドネシア映画の制作者は、それまで、コメディやホラーといった娯楽作品を好んで制作してきた。これに加えて、スハルト時代ならば表現しにくかったような深刻な社会問題や政治問題が扱われ、さらに、新たな提言を内包した作品群が登場した。そこで扱われる問題は、インドネシアの華人問題、一夫多妻制、女性の人身売買、ストリート・チルドレン、異なる宗教間の結婚、ゲイ、地方社会の開発と変容(古きよき伝統の変容)などである³。このような映画作品の多くが社会の関心を引き、興行的にも成功を収めた。いわゆるインディペンデント映画の制作者たちの中からも、数百万人の観客を動員するような作品を制作する監督が登場した⁴。

メディア・ミックス戦略も現代の映画産業の特徴である。たとえば、大衆小説の映画化や、映画の小説化、サウンド・トラック CD とのタイアップ、映画制作の裏話や出演者のインタビューを掲載した解説的な図画集の販売などが見られる。

このような環境下で、インドネシアのイスラムとムスリムを新しい形で描くイスラム的な映画が登場した。これらの映画は当初、都市の中産階級をターゲットとするが、VCDやDVDの販売を通じて他の国の観

客も想定している。

スハルト体制下では、映画はイスラムを村落社会における文明的な要素として描くことが多かった。典型的なホラー映画を例にとれば、イスラムは、黒魔術の影響下にある村落部の下層社会の暗闇を切り開く刀として描かれている。ここではイスラムは文明と合理性を用いて啓蒙する存在である。このような映画は村落部のコミュニティや下層階級を対象としている。Katinkaは、キアイが道化回しの役を担うことで、ホラー映画は宣教映画としての機能を持つと述べている (Katinka 2007: 222)。

これに対して、以下に見る2つのインドネシア映画には、キアイのように問題を最終的に解決してくれる存在は登場しない⁵。個々の登場人物がそれぞれの葛藤を経て成長する物語が描かれる。そこでは、イスラムはただイスラムというだけでは救いの源たりえず、それぞれの信仰心のありようが問われる形がとられている。

1.3 『楽園への長き道』

『楽園への長き道』は、『茶房館』(Ca Bau Kan, 2002年)や『アリサン!』(Arisan!, 2003年)、『夫を分かち合う』(Berbagi Suami, 2006年、邦題は『分かち合う愛』)などの話題作を監督してインドネシア映画の新世代を代表するニア・ディナタがプロデューサーとなり、ジャカルタの映画制作会社カルヤナ・シラ・フィルム(Kalyana Shira Films)とノン・フィクション番組を専門とする国際テレビ制作会社(Tele Productions International, 米国ワシントン州)の協力で制作された。主要な登場人物の国籍はインドネシア、マレーシア、米国、オーストラリアで、それぞれインドネシア語(マレーシア語)と英語を話して字幕をつける形がとられた。ジャカルタで2007年1月に封切られたほか、2007年クアラルンプール国際映画祭にも出品された。

物語は、バリ島爆弾テロ事件が企画・実行され、実行犯が裁かれるまでを4つの異なる場と視点(①テロを企画する人びと、②テロを実行する人びと、③テロを受けて現場で対応を迫られる人びと、④テロを報じる人びと)から描く構成がとられ、それぞれに対

3 インドネシアの華人問題を扱ったものに『茶房館』(Ca Bau Kan, 2002年)、『私をチナと呼ぶな』(Jangan Panggil Aku Cina, 2002年)、『ギー』(Gie, 2005年)、『空を飛びたい盲目の豚』(Babi Buta Yang Ingin Terbang, 2008年)、一夫多妻制を扱ったものに『夫を分かち合う』(Berbagi Suami, 2006年)、女性の人身売買を扱ったものに『女性の物語』(Perempuan Punya Cerita, 2007年)、ストリート・チルドレンを扱ったものに『枕の上の葉』(Daun di Atas Bantal, 1998年)、異なる宗教間の結婚を扱ったものに『チナ+T(神)=チンタ(愛)』(cin(T)a, 2009年)、ゲイを扱ったものに『アリサン!』(Arisan!, 2003年)、『クイッキー・エクスプレス』(Quickie Express, 2007年)などがある。地方社会の描かれ方と関連して、かつて扱われた問題が多かったのは農村地域出身者の大都市への上京物語だったが、バリエーションが増えた。農村地域の描かれ方も変わった。地域社会を独立した1つの社会として描くのではなく、外の世界との繋がりが示唆され、外の世界によって地域が変容を迫られるようになった。その例に『虹の戦士たち』(Laskar Pelangi, 2008年)や『ナガボナル×2』(Naga Bonar Jadi 2, 2007年)などがある。『ナガボナル×2』は1987年の大ヒット映画『ナガボナル』(Naga Bonar)の続編として作られた作品で、両者の相違は興味深い。『ナガボナル』ではスマトラ島北部におけるインドネシア独立戦争が描かれる。主人公ナガボナルは、自身の生活空間の外部からもたらされるさまざまな論理や変化を自分なりに解釈して対応し、自らの世界をつくりなおす。その際に、外部世界の論理は理解されないまま処理される。『ナガボナル×2』では、舞台は現代のジャカルタに移され、ナガボナルとその息子との対話が描かれる。ここでのキーワードは「世界はどう言うか」(Apa kata dunia!)である。娯楽部門では、サスペンスや子どもの視点からの作品が見られるようになっていく。

4 たとえば、『シェリナの冒険』(Petualangan Sherina, 2000年)の大ヒットで知られるようになり、『虹の戦士たち』で480万人の観客を動員したりリ・リザ(Riri Riza)もその一人である。

5 (四方田2009)によれば、インドネシアの怪奇映画について、かつての映画では宗教指導者によって最終的に解消されていた災難や怪現象は、2000年代のインドネシアの怪奇映画においては解消されない。それらの映画においては、怪現象はいかなる超越的存在によっても制御されず、謎は解明されないままに処理されるか、若者たちが協力や成長によって自力で問題を解決する形がとられている。

応して、事件をめぐる4つの問い(①なぜバリ島がターゲットに選ばれたのか、②なぜ天国への道がテロになるのか、③親しい人をテロで失うことをどう受け止めればよいか、④「微笑むテロリスト」を裁けるのか)を考えさせる仕組みとなっている。

テロを引き起こす側の物語は第1の視点と第2の視点に分けられ、テロの背景や動機の重層性が示されている。たとえば、「アラブの同胞」の信頼を失わないようシンガポールの米国戦艦を狙うべきとするハンバリに対し、ムクラスが重視するのは、イスラム急進派に対する当局の取り締まりが強化され、アルカーイダの支援を期待しにくい9.11事件以後の東南アジアで組織の求心力を高めることであり、ただちに必ず実行できるターゲットとしてバリでの実施を主張する。幹部間の激しい議論は互いに自分の力を認めさせるためのものとして描かれ、バリが選ばれるのは「ゴミを自分の庭に捨てる人はいないから」(自分たちが痛みを覚えない場所だから)とされる。

他方、現場では、テロの準備を進めるアムロジが、テロの実施と天国への道が繋がっていることを確信し、迷がない。共に準備を進めるイムロンがテロによるイスラム教徒の犠牲や孤児の増加を懸念すると、「イスラム教徒としての尊い犠牲」であり「米国こそアフガニスタンで孤児をつくった」と論ず。映画は、周囲に評価されないことへの不満を抱え、敬愛するムクラスの評価を気にするアムロジの姿を同時に描くことで、アムロジにとってのイスラム教の意味を観客に考えさせる。また、機転やまじめさといった「よい資質」を備えた信心深いイスラム教徒であるイムロンが、その資質ゆえにテロ実施の障害を切り抜け、結果としてテロの実現を後押しする様を描き、「イスラム教徒として善良」であることの意味を考えさせる。

第3の視点は、9.11事件で恋人が犠牲となったものの、遺体確認ができず、その事実を受け止めきれぬまま恋人が愛したバリ島で長期滞在中に爆弾テロに遭遇した米国人キリスト教徒ハンナを中心に進行する。名も知れず死んでいく犠牲者の姿にやり場のない怒りを抱えたハンナは、自分が恋人にもらったものと同じネックレスを身につけた遺体の身元を探して救援活動に参加する。最初は「なぜあなたたちは私たちを殺すのか」とインドネシア人医師ハジ・イスマイルに詰め寄ったハンナだったが、イスラム教徒による手当てを拒む白人や、外国人観光客の手当てを優先させる病院を嘆くインドネシア人、「平和なバリに米国人と

イスラム教徒が戦争をもちこんだ」と憤るバリ人、テロの犠牲者を宗教・国籍の区別なく助けるハジ・イスマイルらの姿を見るうちに、犠牲者たちはイスラム教徒によってではなくテロリストによって殺されたということを理解する。捜していた遺体の身元は判明し、これを弔うことを通じて、9.11事件以来のハンナのわだかまりも解ける。

第4の視点では、テロ実行犯アムロジの公判取材のためバリ島を訪れたオーストラリア人女性記者リズが描かれる。タクシー運転手ワヤンを運転手兼通訳として雇ったリズは「悲しみと怒りを抱えた犠牲者」を探して街に出るが、街で出会うバリ人からは「外国人は楽園好き。事件で一時失業したが、ホテルができて職を得た」といった感想しか得られない。リズは「自分は同国人の犠牲に怒りを感じるのにバリの人はなぜ怒らないのか」と苛立ち、ワヤンに「知り合いに犠牲者はいないか」と詰め寄る。ワヤンは弟をテロで失っていたが、リズの問いには「いない」と答え、「弟は平安の中にいる」と言い切る。公判ではアムロジに死刑判決が下るが、裁判所から出てきた「微笑むテロリスト」アムロジは意気軒昂で、ここでもリズの期待は裏切られる。そのときリズは、アムロジを囲み写真撮影をして騒ぐ記者たちの中にいる自分を見るワヤンの視線に気づき、アムロジの微笑を支えているのがほかならぬ自分たちであることを理解する。

ここでは、「なぜこんな目にあうのか」という問いにただちに答えを出そうとする態度こそが暴力の原因を宗教や民族の違いに帰し、結果として理不尽な恨みを増幅させていること、そして、憎しみを向けることがテロリストに注目を与え、テロリストを喜ばせるという構造が明確に示されている。これに対して、ワヤンやハジ・イスマイルの姿を通して、誰かを責めるのではなく、理不尽な思いを自分で引き受けて他者に尽くすことで前向きに生きるあり方が恨みの連鎖をとめる可能性が示唆されている。ここには、宗教はそのようなあり方を支えるものであって、その道は長く険しいが、近道はないとのメッセージを読み取ることができる。イスラム教をテロや暴力と同一視する外部社会からのまなざしこそが、テロや暴力をイスラム教の名の下に正当化する行為を支えていることが示唆されている。物語のなかで成長を遂げるのが米国人女性とオーストラリア人記者という「外部者」であることは、この映画が外部のまなざしの変容を強く求めていることの表れであるように思われる。

この映画は、「正義によって裁くこと」の難しさを示している。映画の中でアムロジには死刑判決が下るが、アムロジはこれを喜びをもって迎える。人の法による裁きは、社会的に罰することはできても、裁きが心や内面に及ぶことを保障しない。アムロジの改悔を期待する人びとの思いは裏切られる。この映画は、個々人が救われることを求めるならば、自らの身にふりかかった苦難を受け入れ、他者を責めるかわりに他者に尽くすという姿勢によってであるとの対案が示されている。ここにおいて、劇中のイムロンをどのように位置づけるかは意見がわかれるだろう。イムロンは、よきムスリムとして生き、その結果としてテロ事件を実行し、多くの人を傷つけた。その行いがむなしなのは、イムロンをテロ実行に導き、テロ実行を計画した人びと（イマム・サムドゥラヤムクラスら）が、信仰心とは別のロジック——組織の影響力の維持や活動のアピールのためのテロ実行——をもっていたように見えるためだ。周囲のものの意見をよく聞き、信仰心に厚く、能力に長けた人物が問題の解決や平安の創出に寄与しないというムクラスの描かれ方には考えさせられる。イムロンはなぜテロリストになったのか。この課題は、その後インドネシアで制作されたプサントレンの若者たちをめぐる映画、たとえば『3つの祈りと3つの愛』に引き継がれていくように見える。

1.4 『愛の章』

インドネシアで起こった国際的な事件を扱った『楽園への長き道』に対して、『愛の章』は世界のイスラム学を中心とされるエジプトのアズハル大学を舞台にした恋愛映画である。主人公のインドネシア人青年ファフリは、アズハル大学で学び、「本場」のイスラム教徒と互角にわたりあい、さまざまな宗教・国籍の人びとに慕われる。

この映画の中で、イスラム教は出自にかかわらず学び極めることができるものとして描かれており、エジプトが舞台であることには、世界中の人が集まるエキゾチックな土地という意味が与えられているだけにすぎない。そこでは、正しいイスラム教徒であればインドネシア人であっても引け目を感じる必要はなく、「世界人」となりうる様が描かれている。

では、そのイスラム教とは何か。主人公はコーランをよく学び、イスラム教徒として善良で誰にでも親切で正しくあり、目上の人にも従順である。このように神に対して「正しい」ファフリは、しかし、自分を慕う

女性の心を理解しなかったことで恨みを買ひ、トラブル（無実の罪で囚われの身となる）に巻き込まれることになる。妻アイシャ（ドイツ国籍のトルコ人イスラム教徒）の尽力によりトラブルから脱出するものの、その過程で2人目の妻マリア（エジプト人コプト教徒）を迎えることになる。後半は、一つ屋根の下での2人の妻との暮らしに困惑しながら、自分の家族づくりに努めるファフリの様子が描かれる⁶。

ここでは、神に対して清廉潔白であることと、生きている人びとのあいだで公正であることは別のことであることが明示されている。また、ファフリがつくる家族は国籍や宗教を異にするにもかかわらず、その違いが強調されていない点も興味深い。本作品からは、この世に生きる限り、神との関係を正しくするだけでは不十分で、人と人との関係に関心や犠牲を払いながら、自分の生きる場をつくることが重要であるとのメッセージが読み取れる。

『愛の章』で興味深いのは、ファフリとアイシャが出会う電車の中のシーンである。エジプト人の乗客が、乗り合わせた外国人女性——肌を露出した白人女性で、アメリカ人であることが示唆されている——を「おまえたちこそがテロリスト」だとなじり、これをファフリがコーランの章句を引用しながら論ず。これは、テロリスト駆逐のロジックの不毛性を明確に示している。テロをめぐる戦争の不毛性を批判し、その中に組み込まれない位置に立つことをめざしていることは明らかだ。なお、原作では、ファフリによって守られた外国人女性——後にアメリカ人ジャーナリストであることが判明する——はイスラム教に改宗するが、映画ではそれが無い。このことも、監督が何を重視してこの映画を制作したかを示していると思われる。

また、映画の中では野蛮で見識に欠けるエジプト人の姿が描かれている。電車の中で外国人女性をなじった男性のほかにも、養女を妊娠させ、売春宿に売ろうとし、さらに自らの悪事を知るマリアの殺害を試みるエジプト人男性が登場する。イスラムの「本場」である中東のムスリムがただそれだけでは尊敬に値しない様子や、インドネシア人が中東のムスリムを教え諭す様子が描かれることで、中東のイスラムの土着化と東南アジアのイスラムの普遍化がはかられているともいえるだろう。

6 原作の小説では、2人の妻との生活の場面は描かれていない。この場面は、監督が映画のために意図的に挿入したものであるという。

このようなエジプト人の描き方は、一面では中東のムスリムを画一的に理解していることのあらわれであるともいえるが、それと別の面として、これまで中東を中心とするイスラム世界の周縁に位置づけられてきたインドネシアにおいてこのような映画が制作されたことの意味は大きい。ユドヨノ大統領が各国大使を招待して特別上映会を催し、「インドネシア発のイスラム映画」と胸を張った背景には、この映画の持つこうしたメッセージがインドネシアの目指すべき道をも示していたからのように思われる。

このようなメッセージを持つ本作が大ヒットとなったことには、インドネシアのムスリムの立場を誰がどのように示すのかという問題と関連して、もう1つ別の意味があるだろう。かつて王国がヒカヤット(王統記)の形で提示したもの、近代に入ってからには政党の綱領や国是という形で提示されたものが、ここでは映画という大衆文化の形で示されている。大統領が後からお墨付きを与えたということは、この物語が王や国や政府の物語として描かれたのではなく、人びとの物語として描かれたということでもある。これは、物語の作り手とその伝え方が多様化するグローバル化の時代のメディアの状況に対応した現象といえるだろう。

このように、2002年バリ島爆弾テロ事件以降のインドネシア映画には、これまでに見られなかったようなイスラム像が描かれている。そこには、テロとイスラムとの関係についてさまざまな考察が試みられている様子を見て取ることができる。信仰がテロに向かうことを否定するだけでなく、神への道を追究することの重要性を説きながら、同時に、この世の多様な人びととの共生の重要性が説かれている。また、従来、イスラム世界の周縁に位置づけられてきたインドネシアのイスラムを、世界に発信しうる普遍的な価値をもつイスラムと位置づける主張が見られる。これは、諸問題の発生や解決は個々人の実践の積み重ねのうえにあるという主張でもある。「指導された民主主義」やパンチャシラのようにインドネシアに固有の普遍がめざされた時代から、その一歩先がめざされたともいえるだろう。

2. 2004年スマトラ沖地震津波とインドネシアの災害対応

2.1 「災害で危ないインドネシア」

2004年スマトラ沖地震津波の発生以来、毎年のよ

うに大地震が発生してインドネシアの各地で被害が相次いだことは、インドネシア社会に「災害で危ないインドネシア」という見方を定着させつつあるように見える。

2004年スマトラ沖地震津波は、インドネシアの災害対応の歴史の大きな画期となった。第一に、自然災害への対応、つまり防災や緊急人道支援、被災地の復興といったものが国際協力の焦点課題となり得るということを経験した災害だった。災害が起こると域外から人道支援の人びとがやってくること、また、災害への対応は世界の課題であることをインドネシア社会が認識した災害だった。これ以降の自然災害は、誰が支援するのか——救援・復興活動は州のレベルで行うのか、国のレベルでやるのか、それとも国際社会に支援を求めるのかといったこと——が必ず問われるものとしてインドネシア社会の目の前に現れることになった。

第二に、自然災害の対応には制度的な対応が必要であるということの人びとが認識するようになった。2004年スマトラ沖地震津波の際には、インドネシア政府はアチェ・ニマス復興再建庁(BRR)という特設機関を設けて救援復興活動を調整した。その後、中央政府・地方政府における災害対策の機関の整備や、災害対策法の整備も進められた。2004年スマトラ沖地震津波は、自然災害をそのような制度的な対応の対象にしたといえる。

第三に、インドネシアにとってのボランティア元年の幕開けとなった。2004年スマトラ沖地震津波の際には、バンダアチェ市内だけで数万体の遺体が市内に押し流された。遺体の収容や、そのほかさまざまな人道支援活動のために、インドネシアのほかの地域の人びとが多数アチェを訪れ、インドネシア語でボランティアをさす「レラワン」(relawan)として活動した。阪神淡路大震災の発生した1995年が日本社会にとってボランティア元年となったように、2004年スマトラ沖地震津波は、インドネシア社会がボランティア活動を社会活動の一領域として認識する契機となった。これ以降、インドネシアでは、自然災害が起こるとほかの地域の人びとが救援復興活動に駆けつけるということがごく一般的に見られるようになった。

とはいえ、2004年スマトラ沖地震津波は、被害がインドネシアの北西端に位置するアチェ州に集中したことで、多くの人びとにとって、地震そのものはどこ

か別のところで発生するものだと受け止められていたようだ。ところが、以後も地震災害がほぼ毎年のように発生したことで、インドネシアの人びとにとって地震が身近なものとなってきた。中には2006年ジャワ島中部地震のように国際的な支援の対象となった地震もあり、また、2009年には9月2日に西ジャワ地震が、9月30日に西スマトラ地震が発生した。西ジャワ地震では、首都ジャカルタに隣接する地域が大きく揺れ、それまで地震はひとごとであると思っていた人も含め、インドネシア中の人びとが「地震は起こる。自分たちの住んでいるところがいつ揺れるかわからないし、地震が発生すれば何が起ころうもおかしくない」と実感するようになった。また、西スマトラ地震では、西スマトラ州パダン市が大きな被害を受け、都市災害の恐ろしさが報道によって伝えられた。

インドネシアではこの間、地震以外にも、多くの人々が死傷したり避難を余儀なくされたりする事件が相次いだ。ポソ紛争などの社会的紛争や、中部ジャワ州のシドアルジョの熱泥噴出事件、マンダラ航空機の墜落事件などである。それらは、人知をこえた災いという意味でいずれも「災厄」(bencana)であるとされる。2007年に制定された災害対策基本法でも、対応すべき「災害」(bencana)は、(1)自然災害、(2)人的災害、(3)科学災害の3つの点から広く捉えられている。ここでは、地震や噴火、洪水などの自然災害に加えて、化学工場の事故や船舶・飛行機事故などを技術の発展に起因する技術災害として、また、社会騒乱やテロを人的災害として、いずれも「災害」と捉えたうえで、対応をはかる方針が示されている。

2.2 災害対応——防災読本

現在、インドネシアでは、災害は誰の身にも起こりうる事柄であるとする論調が増えている。「インドネシアは災害で危ない」(Indonesia Rawan Bencana)を冠した書籍の出版が増えている⁷。

そのような書籍の1つである(Ella 2008)では、地震、津波、火山、地滑り、火事災害への対応が示されている。外国の防災読本の引き写しではなく、インドネシアの事情に即して災害ごとの対応が示されている。インドネシアの事例の写真や挿絵がふんだんに盛り込まれ、災害の原因、災害発生時には何が起こるか、災害にどのように備えるべきか、災害発生後はどのように対応すればよいかを示されている。ここで興味

深い点が2つある。1つめは、大災害においては災害対策事務所も「公正な店」も被害を免れないことが示唆されていること、2つめは、災害への対応においては被災地以外の地域の人びとからの支援が重要であり、日頃からよい関係を結ぶことの必要性が指摘されていることである。

第一の点は同書の地震の項に示されている。ここには「地震の震度」の項目が設けられ、震度に応じてどのようなことが起こるかがイラストにより丁寧に説明されている。震度9では人間は起立を維持できず、地面から中空に放り出され、「地震監視施設」も崩壊する様子が描かれる。震度10ではほとんど全ての建造物が倒壊し、「公正な店(Toko Adil)」と看板を掲げた店も倒壊している様子が描かれている。

ここで、壊れた店の看板にわざわざ「公正な店」と書かれていることから、大地震が発生すると、たとえ「公正」な人であっても被災を免れないというメッセージを読み取れる。2004年スマトラ沖地震津波でアチェが被災したことについて、被災地域でも、また、インドネシア国内の他の地域でも、これを「天罰」とする考えが見られた。これは、一見すると災害犠牲者に鞭打つ言葉のように見える。アチェは長年にわたる紛争地であり、インドネシアを悩ませてきたため、紛争を続けるアチェに「天罰」がくだったとの見方もあった。しかし、津波は神の思し召しであるとする見方は、神の為せる業は人智の範囲外にあり、したがって被災した人そのものに原因があるわけでも、また、生き残った者が悪いわけでもないとの考えを導き得る。

このことは、さらに次のような考え方を導くことになる。災害は被災者を選ばないため、誰もが災害に備える必要があるし、災害に見舞われた後にどのように対応するかが重要である。ここには、災害を神の為せる業にするロジックの上に防災や復興を起こそうとする工夫を見ることができる。

第二の点は同書の津波の項に示されている。津波の項は「津波」と「津波への対応」の2つの項目からなっており、それぞれの目次は次の通りである。

●津波

(A)津波の発生

(B)津波が発生する予兆

●津波への対応

(A)津波のリスクを減ずる(1. 海岸線を保護する、2. 早期警報システム、3. 教育と学習、4. パートナースhip、5. 危険地帯と避難所のマッピング、6.

7 (Mudfi 2009) (Made 2009)など。

- 災害対策ボスコの整備⁸、7. 災害対策チーム)
- (B) 津波を乗り越える (1. 津波危険地区を知る、2. 津波発生直前、津波発生時、津波発生後の行動を理解する)
- (C) 避難と復興 (1. 政府は住民とそのほかの機関・団体によって助けられる、2. 復興における優先順位)
- 「津波への対応」の「(A) 津波のリスクを減ずる」の「4. パートナースhip」の項目には次のように書かれている。

津波被害が発生したときに支援を与えてくれるような国内外の諸グループとパートナーシップを結んでおく。状況に応じた支援を得るにはガイドブック (buku direktori) が必要となる。ガイドブックには、支援機関の種類と住所、連絡のための電話番号、そして、保健、トラウマ・ケア、教育、住宅供与、職業訓練など、それぞれに応じた支援の種類が記されている。

被災時に域外からの支援が重要な役割を果たすため、日頃から地域の外の人びととの関係を良好に維持することが日常的な防災策として提言されている。

結びにかえて

リスク社会は、自己責任の社会ともいい換えられ、個々人がさまざまな危険にさらされうる厳しい社会として想定されている。グローバル化の進展がこのような状況を促進していると考えられ、そこでは、公的な支援 (国策としての福祉政策) だけでは人びとの生活は十分に保障されない。保護が手薄な状況に対する対策として、これまで一般に指摘されてきたのは、ローカルなコミュニティを再生させ、これを相互扶助の枠組みとする (共助) か、自らで自らを助ける自助である。

これに対して、グローバル化の進展や技術の進展を通じて、新しい社会の状況に対応しようとする状況を見て取ることができる。

2002年バリ島爆弾テロ事件以降のインドネシア映画が新しいイスラム像を提示することの意味を考えると、その背景には、個々人が直接さまざまな情報源から情報を収集し、また、自ら発信することができるようになったという情報の技術革新がある。これは、危険なテロ思想がインドネシアに持ち込まれやすくなったという側面がある一方で、同時に、イスラム関連の情報の発信の形態・発信元・主張の多様化を促

進、テロにつながる思想を相対化する側面をもつ。こうしたなかで、本稿の前半で示したイスラム像の提示が可能になっている。

また、本稿の後半で検討したインドネシアの災害対応のありようからは、境界を越えてもたらされるものは「越境するテロ」のような脅威だけでないこと、すなわち、2004年スマトラ沖地震津波の際に世界各地の団体・機関によって行われた救援復興活動のように、支援もまた境界を越えてもたらされるものであることがインドネシアで認識されていることが理解される。グローバル化には正の側面と負の側面がある。外部世界に起源をもつ普遍主義的な論理には、個別地域社会の秩序に変革をもたらし、地域社会だけでは解決が困難な諸問題に改善の機会を与えると、いう積極的な意味を見出すことができる。その一方で、地域秩序に介入し、地域の実情にそぐわない論理を普遍の名によって押し付けるという負の側面も指摘される。また、普遍主義的な論理は1つに定まらず、複数の普遍どうしが競合する状況も存在する。

これに対して、インドネシア映画にみるイスラム像からは、個別の地域社会がローカルな立場から普遍的価値をもつ論理を提示する試みを見て取ることができる。また、大規模自然災害への対応については、人類社会の誰にもふりかかりうる災難という意味でのグローバルな負 (災害) に対して、外部からのグローバルな正 (支援) の力を添えて対応するという姿勢が示されているといえる。いずれも、問われているのは個々人の対応であり、その道を示す方策が、現代のインドネシアではさまざまな形で試みられているといえるだろう。

参考文献

- Evi Rine Hartuti. 2009. *Buku Pintar Gempa*. Jogjakarta: DIVA Press.
- Ella Yulaelawati & Usman Syihab. 2008. *Mencerdasi Bencana: Gempa, Tsunami, Gunung Api, Banjir, Tanah Longsor, Kebakaran*. Jakarta: Grasindo.
- Katinka van Heeren. 2007. "Return of the Kyai: Representations of Horror, Commerce, and Censorship in Post-Suharto Indonesian Film and Television". *Inter-Asia Cultural Studies*. 8 (2).
- Krishna Sen. 2006. "Indonesia: Screening a Nation in the Post-New Order" in Anne Tereska Cieccko (ed.).

8 インドネシアのボスコについては (山本2010) を参照。

Contemporary Asian Cinema: Popular Culture in a Global Frame. Oxford: Berg Publishers. pp.96-107.

Krishna Sen & David T. Hill. 2007. *Media, Culture and Politics in Indonesia*. Singapore: Equinox Publishing.

Made Sandiogo. 2009. *Indonesia Rawan Bencana Tahun 2010-2014: Kenali Tandanya dan Ketahui Cara Menyasatinya!*. Jakarta: Kompas Gramedia.

Mudfi Mubarak. 2009. *Awat!! Indonesia Rawan Bencana (Gempa Bumi, Tsunami, Banjir, Abrasi, Human Error...)*. Surabaya: Java Pustaka Media Utama.

Rohmat Haryadi. 2008. *Saat Bioskop Jadi Majelis Taklim: Sihir Film Ayat-Ayat Cinta*. Jakarta: Hikmah.

Singh, Bilveer. 2007. *The Talibanization of Southeast Asia: Losing the War on Terror to Islamist Extremists*. Westport: Praeger Security International.

大澤真幸 2008『不可能性の時代』岩波書店。

西芳実 2009「スマトラ沖地震・津波／インドネシア（2004年）：変革の契機としての自然災害」『アジア研ワールド・トレンド』、No.165、pp.19-22。

—— 2009「裏切られる津波被災者像：災害は私たちに何を乗り越せさせるのか」林勲男（編著）『自然災害と復興支援』明石書店、pp.383-402。

山下範久 2008『現代帝国論——人類史の中のグローバリゼーション』日本放送出版会。

山本博之 2010「人道支援活動とコミュニティの形成」林勲男（編著）『自然災害と復興支援』明石書店、pp.361-382。

矢守克也 2009『防災人間科学』東京大学出版会。

四方田犬彦 2009『怪奇映画天国アジア』白水社。